

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 6 日現在

機関番号：34101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380899

研究課題名(和文) 児童期から青年期の親子間葛藤に関する質的・量的研究

研究課題名(英文) Qualitative and quantitative study about parent-child conflict from childhood to adolescence

研究代表者

渡邊 賢二 (Watanabe, Kenji)

皇學館大学・教育学部・教授

研究者番号：50369568

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：大学生に中学生時代、高校生時代、現在の親子間葛藤について回想させ、葛藤内容、葛藤頻度、親への感情について面接を行った結果、部活動、不登校、日常の勉強、受験・進路、起床、門限、習い事、部屋の片づけ、夫婦問題、きょうだいに分類された。また中学生の時が最も葛藤が多く、学生の多くは現在親に感謝の気持ちを抱いていた。

母子間葛藤と養育態度、適応との関連について、横断的、縦断的に質問紙調査を行った結果、子どもは小学生より中学生の方が母子間葛藤を高く認知していた。また、良好な養育態度と心理的統制は母子間葛藤に、母子間葛藤は子どもの精神的健康、心理的ストレスに影響を及ぼしていた。

研究成果の概要(英文)：This study was interviewed university student about parent-child conflict when he was a junior high student, a high school student and university student. The kind of conflict were club activity, nonattendance, daily learning, examination, choice of career, the hour of rising, a closing time, lessons, cleaning up in my room, husband and wife problems, and sibling. When they were junior high students, they had the highest frequency conflict. Most of university students had gratitude against parent at present.

These studies were examined cross-sectional and longitudinal questionnaire about the relationship between mother-child conflict, parenting attitude and adjustment. Children recognized conflict higher junior high school students than elementary school students. Good parenting attitude and psychological control predicted mother-child conflict, and mother-child conflict predicted well-being and psychological stress.

研究分野：教育心理学

キーワード：親子間葛藤 養育態度 青年期 児童期 母子 面接調査 質問紙調査

1. 研究開始当初の背景

児童期から青年期への移行の時期は、身体的・性的な変化、アイデンティティの問題、また中学生へ移行することにより、友人関係や教師との関係の変化、学習の困難さなど、多様な変化や問題が顕在化してくると言われている。青年期はそのような変化や問題のほかに、家族の監督から離れ1人の独立した人間になろうと心理的に離乳していき、親子の葛藤が生じやすくなる時期であると言われている(西平, 1990 など)。

これまで、青年期の親子間葛藤に関する研究は、米国では盛んに行われてきている。Dekovic(1999)は12歳から18歳の子どもとその親を対象に調査を行い、親子間葛藤の頻度と子どもの抑うつとの間には正の相関関係があることを見出している。Harold, Aitken, & Shelton(2007)は11歳から13歳の子どもとその親を対象に縦断的調査を行い、親子間葛藤がネガティブな養育態度に影響を及ぼし、ネガティブな養育態度は学業成績に影響を及ぼすことを報告している。これらの研究は、青年期の親子間葛藤は子どもの適応や学業に良い影響を及ぼさないことを示唆している。このような適応や学業の問題に関することは、青年期の子どもたちの生活において、重要な位置を占めていると考えられる。

我が国の青年期の親子間葛藤に関する研究では、杉村・竹尾・山崎(2007)が青年一両親間の葛藤場面における青年の行動と意見の伝え方、葛藤解決行動について、15名の青年を対象に葛藤場面を提示して、面接調査を実施した結果、青年は家庭内では自分の欲求を主張するが、家庭外では友人に配慮した自己主張をするとして述べている。また白井(2015)は高校生の子どもをもつ母親を対象に親子間葛藤について面接とメールにて調査を行い、親子間葛藤を経験することによって、自律が達成されるだけでなく、愛着が回復していくという結果を見出している。しかし、我が国の児童期から青年期の親子間葛藤に関する研究については、質的・量的な研究ともあまりなされていない。そこで本研究では、第一に、面接調査を用いて、我が国での親子間葛藤の内容、葛藤頻度、葛藤を終えてからの親への感情について検討する。第二に、質問紙調査を用いて、小学高学年から中学生とその母親の母子間葛藤の相違(子どもの性別、学年差)、母子間葛藤との関連要因について検討する。

2. 研究の目的

(1) 大学生を対象に半構造化面接調査を行い、中学生、高校生、大学生(現在)の親子間葛藤を回想し、各時期の最も強く印象に残っている親子間葛藤の内容、葛藤頻度、現在の親に対する感情について検討する。

(2) 米国で用いられている親子間葛藤尺度(以下CBQ)(Sturge-Apple, Gondoli, Bonds,

& Salem(2003)を翻訳し、小学5年生から中学3年生とその母親を対象に質問紙調査を実施し、横断的に母子間葛藤と養育態度、精神的健康などとの関連について検討する。

(3) CBQを用いて、小学6年生とその母親を対象に2年間の縦断調査を行い、母子間葛藤の変化と養育態度、心理的統制、心理的ストレスなどとの関連について検討する。

3. 研究の方法

(1) 大学1年生30名を対象に、20分から40分(平均時間27分)の半構造化面接を実施した。面接内容は、①家族構成、年齢、現在の住居、②中学生、高校生、大学生(現在)の各時期で、親とどのような葛藤や衝突があったか、③最も葛藤や衝突が激しかった時期、④現在、親にどのような感情をもっているのか尋ねた。

(2) 小学校5校と中学校3校の小学5年生～中学3年生とその母親1612組を対象に、質問紙調査を実施した。質問紙調査の内容は、CBQ(4件法;1点～4点)、養育スキル尺度(6件法;1点～6点)、精神的健康尺度(6件法;0点～5点)であった。

(3) 1年目は小学校14校の小学6年生(2年目は中学校4校の中学1年生)とその母親738組を対象に、質問紙調査を実施した。質問紙調査の内容は、CBQ、養育態度尺度(養育スキル尺度、心理的統制尺度(7件法;1点～7点)、心理的ストレス反応尺度(4件法;0点～3点)であった。

4. 研究成果

(1) 大学生が回想した親子間葛藤一面接調査より-

①KJ法による葛藤・衝突内容の分析

面接調査で得られた各時期の葛藤・衝突内容をKJ法により分析した。その結果、第1段階では、<学校・学習>と<家庭>に分類された。第2段階では、<学校・学習>のカテゴリーを<学校生活>と<勉強>、<家庭>のカテゴリーを<家庭での生活>と<家族>に分類した。第3段階では、<学校生活>を【部活動】と【不登校】、<勉強>を【日常の勉強】と【受験・進路】に分類した。家庭での生活を【起床】と【門限】と【習い事】と【部屋の片づけ】と【全般的】、<家族>を【夫婦問題】と【きょうだい】に分類した。

Robin(1975)が作成したチェックリストでは、「自分の部屋の掃除」、「家事の手伝い」、「きょうだいケンカ」、「衣服の片づけ」、「宿題をすること」、「就寝時間」、「テレビを見る時間」、「成績」などが挙げられており、またこれらの項目は11歳から14歳までの子どもと親との葛藤の上位を占めている(Reisch, Bush, Nelson, Ohm, Portz, Abell, Wightman, & Jenkins, 2000)。【日常の勉強】、【起床】、【部

屋の片づけ】は共通している項目であるが、【門限】、【部活動】、【受験・進路】、【習い事】は、このリストには含まれていなかった。これらの項目は我が国特有の親子間葛藤と考えられ、文化差があることが推察される。

②中学生、高校生、大学生での葛藤数（語り）や葛藤内容の変化
全体の葛藤数（語り）は中学生のときが27、高校生のときが19、大学生のときが5であった。子どもの成長・発達とともに葛藤数が減少していたことは、米国の先行研究と同様であった。しかし、本研究は大学生が回想して葛藤を語っており、単純には比較検討できないと考えられる。また調査協力者の中には、現在一人暮らしをしている大学生もおり、一概に比較できないと思われる。

特徴のあるカテゴリーとその変化に関しては、【部活動】では、中学生のときが3、高校生と大学生のときの語りはなかった。【不登校】については、中学生のときが1、高校生と大学生のときの語りはなかった。部活動に所属することは、中学生になって初めての人が多く、子どもは部活動での人間関係などの問題や悩みが生じやすい。そこで子どもと親との意見や考えの相違が生じて、葛藤や衝突が出現していると思われる。また高校生になると、部活動に所属している人が中学生と比較すると減少していることや、部活動の帰属意識も中学生より高校生の方が強いことが考えられるため、高校生のときには語りがなかったと推察される。

【日常の勉強】については、中学生のときが5、高校生のときが4であった。大学生のときは語りがなかった。親は中学生と高校生にとって、勉強することは非常に重要であると考え、中学生と高校生にとっては、勉強をできるだけ短時間で済ませたいとか、勉強は後でするからなど、勉強を親ほど重要と捉えていない可能性があるため、親子の葛藤や衝突が生じるのではないかと思われる。【受験・進路】については、中学生のときが2、高校生のときが6であった。大学生のときは語りがなかった。中学生のときは、受験についての語りであったが、高校生になると、将来の職業や受験についての語り为主であり、中学生と比較するとより具体的になってきていると思われる。

【門限】については、中学生と高校生のときが6、大学生のときが3であった。中学生、高校生、大学生と順に、門限が遅い時間になっており、親は子どもの成長とともに考え方を変化させていることが推察される。しかし、親は娘に対して、危機管理的な意識も強くもっており、管理的な養育になっているケースもある。【部屋の片づけ】について、葛藤数は中学生と高校生のときは2、大学生のときは1と少数であった。非常に身近で、目につきやすく、葛藤や衝突になりやすいケースと思われるが、日常茶飯事なことであり、記憶にとどめにくいこととも考えられる。

③親子の葛藤・衝突が最も激しかった時期
親子の葛藤・衝突が最も激しかった時期（学年）について検討した。その結果、中学生と回答した学生は21名（70%）いた。Smetana, Daddis, & Chuang(2003)は、青年期前期より中期の方が葛藤が激しいと述べているが、本研究では中学生の方が激しいという結果であった。本研究は面接調査による研究であるため、単純には比較検討はできないと思われる。

また、親子の葛藤・衝突がなかった学生が2名（約7%）いた。細田（2008）は大学生を対象に、親に対して反抗があったかを尋ねたところ「なかった」と答える人が少なくなかったと述べている。また白井（2003）は1950年の調査論文を受けて、「昔の青年でもさほど親との葛藤がなかった」と考えられること、そしてその状況を踏まえて、「今日の青年が顕著に葛藤がなくなったということではないといえそうである」という見解を示している。これらから考えると、本研究で葛藤や衝突がなかったと回答した2名（約7%）というのは、少数だったともいえる。しかし、本研究では、親との葛藤や衝突がなかった人は、面接調査に参加する必要がないと考えていた学生もおり、少数になった可能性もある。

さらに、中学生から高校生にかけて、2年間以上も親との葛藤や衝突があった学生が11名（約37%）もいた。長期間の親との葛藤や衝突は子どもの心理的適応に影響を及ぼしていることが考えられる（Dekovic, 1999）。本研究では、親子間の葛藤や衝突があった期間の心理的適応については、調査を行っていないため、今後は調査する必要があるだろう。

④現在の親に対する感情

現在の親に対する感情について、面接調査を行った結果、18名（60%）の学生が親に対して好意的な意見や気持ちを語っており、これまで育ててくれたことや大学に行かせてくれたことに対して感謝の気持ちや、親のような家族をもちたいという親を尊敬している気持ちを抱いていた。また、これらの学生の親との葛藤や衝突は、中学生や高校生のときで終息しているか、葛藤や衝突が全くないという結果であった。反対に、親に対して否定的な感情を抱いていた学生は、中学生から大学生まで、親との葛藤や衝突が継続しており、「早く親と離れたい」、「親を恨んでいる」などの想いを語っていた。

(2) 児童期から青年期前期の母子間葛藤と養育態度—子どもの性差と学年差に着目して—

①CBQの構成

CBQ22項目日本語版について探索的因子分析を実施した。まず、子どもと母親が認知するCBQ22項目に対して、別々に主因子法・Varimax回転による因子分析を行った。双方とも固有値の減衰状況、解釈の可能性から3

因子構造が妥当であると考えられた。17項目の全分散を説明する割合は子どもが 52.12%、母親が 49.37%であった。

子どもと母親が認知する CBQ の因子分析結果から、項目内容は各因子とも共通であった。第 1 因子は、「少なくとも 1 週間に 3 度は、私たちはケンカをする」など 7 項目で構成されており、子どもと母親が衝突や葛藤の行動をおこなっている項目内容であるため、『衝突』と命名した。第 2 因子は、「少なくとも 1 日 1 度は、私たちは楽しい会話をする」(逆転項目) など 7 項目で構成されており、子どもと母親が仲がよくない行動をとっている項目内容のため、『不仲』と命名した。第 3 因子は、「私と親(私と子ども)はケンカするときには、お互いに妥協しあい、歩み寄る」(逆転項目) など 3 項目で構成されており、子どもと母親が衝突や葛藤に関して歩み寄りのない行動をとっている項目内容のため、『歩み寄り欠如』と命名した。

子どもと母親が認知する CBQ 下位尺度の平均得点 (SD) と信頼性係数 (α 係数) を求めた。子どもが認知する衝突得点は 1.53(.60), $\alpha=.83$, 不仲得点は 1.73(.61), $\alpha=.79$, 歩み寄り欠如得点は 2.57(.85), $\alpha=.69$, 母親が認知する衝突得点は 1.45(.52), $\alpha=.81$, 不仲得点は 1.44(.47), $\alpha=.77$, 歩み寄り欠如得点は 2.30(.69), $\alpha=.63$ であった。

次に、子どもと母親が認知する CBQ の確認的因子分析を行った。その結果、子どもが認知する CBQ の適合度は、GFI=.984, AGFI=.956, CFI=.983, RMSEA=.042, 母親が認知する CBQ の適合度は、GFI=.989, AGFI=.971, CFI=.989, RMSEA=.031 であった。CBQ の適合度は十分な値を示しているとは判断した。

米国での Steeger & Gondoli (2013) の研究から、6 年生から 8 年生の子どもとその母親の母子間葛藤尺度の平均値は 1.57 と 1.60 と考えられ、本研究の平均値とはあまり相違がなかった。これらより、日本も米国も母子間葛藤の頻度は低いと思われる。また、3 因子とも母親より子どもの方が得点が高い傾向にあるが、Steeger & Gondoli (2013) の研究では、子どもより母親の方が若干得点が高く、本研究とは相違があるように考えられる。

②子どもと母親が認知する CBQ の性別と学年別による 2 要因分散分析

子どもと母親が認知する CBQ 下位尺度の子どもの性別と学年による差異を検討するために、子どもの性別と学年を独立変数、子どもと母親が認知する CBQ の下位尺度である「衝突」、「不仲」、「歩み寄り欠如」得点を従属変数として 2 要因分散分析を実施した。その結果、子どもが認知した CBQ に関して、「衝突」については、性別と学年の主効果、交互作用とも有意ではなかった。「不仲」については、性別の主効果では女子より男子 ($F=106.32, p<.001$), 学年の主効果では小学 5 年生と 6 年生より中学 1 年生, 2 年生, 3 年

生の方が有意に高い得点を示した ($F=15.34, p<.001$)。交互作用も有意であり、小学 5 年生, 中学 1 年生, 2 年生, 3 年生では女子より男子の方が有意に高い得点を示した ($F=5.14, p<.001$)。また男子では、小学 5 年生, 6 年生より中学 1 年生, 2 年生, 3 年生の方が有意に高い得点を示した ($F=5.14, p<.001$)。「歩み寄り欠如」については、性別の主効果と交互作用は有意ではなかったが、学年の主効果では小学 5 年生, 6 年生より中学 1 年生, 2 年生, 3 年生の方が有意に高い得点を示した ($F=24.76, p<.001$)。母親が認知した CBQ に関して、「衝突」については、学年の主効果と交互作用は有意ではなかったが、性別の主効果では男子より女子の方が有意に高い得点を示した ($F=7.06, p<.01$)。「不仲」については、交互作用は有意ではなかったが、性別の主効果では女子より男子 ($F=12.00, p<.01$), 学年の主効果では小学 5 年生, 6 年生, 中学 1 年生より中学 3 年生の方が有意に高い得点を示した ($F=7.19, p<.001$)。「歩み寄り欠如」については、性別と学年の主効果、交互作用とも有意ではなかった。これらより、母子間葛藤を母親より子どもの方が高く感じている傾向にあり、米国とは相違がみられた。また、母子間葛藤下位尺度によって相違はあるが男性より女性、小学生より中学生の方が葛藤を高く認知していた。これは米国での研究と類似した結果となった。

③母子間葛藤と養育スキル、精神的健康との関連

2 要因分散分析の結果より、小学生と中学生、また性別により得点差があることが示された。この結果を踏まえて、小学生と中学生別、性別による母子間葛藤と養育スキル、精神的健康のモデルについて共分散構造分析を行った。なお、子どもと母親が認知する母子間葛藤尺度の下位尺度である「衝突」「不仲」「歩み寄り欠如」については、子どもと母親の得点を合成変数として用いた。子どもと母親が認知する養育スキルの下位尺度である理解尊重スキルと道徳性スキルが母子間葛藤の下位尺度である「衝突」「不仲」「歩み寄り欠如」を予測し、「衝突」「不仲」「歩み寄り欠如」が精神的健康を予測するというモデルを検討した。その結果、モデルの適合度は、GFI=.995, AGFI=.955, CFI=.997, RMSEA=.022 であった。適合度は十分な値を示しているといえる。

小学生とその母親については、男子が認知する理解尊重スキルが「衝突」に影響を及ぼすことを除いて、男女の子どもとその母親が認知する理解尊重スキルは、「衝突」($\beta=-.23, p<.05$), 「不仲」($\beta=-.31; -.41, p<.001$), 「歩み寄り欠如」($\beta=-.52; -.34, p<.001$)に負の影響を及ぼしていた。男女が認知する「不仲」($\beta=-.27; -.30, p<.001$)が精神的健康に負の影響を及ぼしていた。女子が認知する「衝突」(β

$\beta = -.16, p < .05$) が精神的健康に負の影響を及ぼしていた。また男女の子どもが認知する理解尊重スキルが精神的健康に正の影響を及ぼしていた ($\beta = .30, p < .01; .22, p < .05$)。次に、中学生とその母親については、男女の子どもとその母親が認知する理解尊重スキルは、「衝突」 ($\beta = -.18, p < .01; -.40, p < .001$)、「不仲」 ($\beta = -.34; -.49, p < .001$)、「歩み寄り欠如」 ($\beta = -.32; -.24, p < .001$) に負の影響を及ぼしていた。母親が認知する道徳性スキルが「衝突」に正の影響を及ぼしていた ($\beta = .21, p < .001; .15, p < .01$)。男女の子どもが認知する「不仲」が精神的健康に負の影響を及ぼしていた ($\beta = -.24; -.24, p < .001$)。また男女の子どもが認知する理解尊重スキルが精神的健康に正の影響を及ぼしていた ($\beta = .22; .36, p < .001$)。これらより、小学5年生から中学3年生とその母親の母子間葛藤を抑制するには、また精神的健康を向上させるには、理解尊重スキルを用いた養育態度が重要であるということが示唆された。

(3) 児童期における母子間葛藤と養育態度、心理的ストレス反応との関連

子どもと母親が認知する母子間葛藤と養育態度 (理解尊重スキル、道徳性スキル、心理的統制)、心理的ストレス反応 (抑うつ・不安、不機嫌・怒り、無気力) との関連を検討するために、ピアソンの積率相関係数を求めた。その結果、子どもと母親が認知する母子間葛藤と理解尊重スキル ($r = -.66, -.60$)、道徳性スキル ($r = -.47, -.28$)、心理的統制 ($r = .47, .43$)、抑うつ・不安 ($r = .38, .36$)、不機嫌・怒り ($r = .39, .49$)、無気力 ($r = .39, .42$) (すべて $p < .001$) の間で有意な相関関係が認められた。

養育態度である養育スキル (理解尊重スキル、道徳性スキル) と心理的統制が母子間葛藤を媒介して、心理的ストレス反応を予測するか検討するために、子どもの性別、母子別に共分散構造分析を実施した。子どもが認知するCBQの適合度は、 $GFI = .985, AGFI = .931, CFI = .991, RMSEA = .051$ 、母親が認知するCBQの適合度は、 $GFI = .982, AGFI = .918, CFI = .987, RMSEA = .059$ であった。子どもと母親が認知するCBQの適合度は十分な値を示していると判断した。子どもと母親、男女双方とも (子・男/女, 母・男/女)、理解尊重スキルが母子間葛藤を抑制し ($\beta = -.57/-.57, -.59/-.54$)、心理的統制が母子間葛藤に影響を及ぼし ($\beta = .31/.29, .27/.28$)、母子間葛藤が心理的ストレス反応である抑うつ・不安 ($\beta = .52/.60, .48/.43$)、不機嫌・怒り ($\beta = .58/.58, .63/.57$)、無気力 ($\beta = .60/.68, .53/.50$) に影響を及ぼしていた。子どもの態度を統制しようとする母親の養育態度は、母子間の葛藤を引き起こし、その葛藤が抑うつや不安な気持ち、不機嫌や怒りの感情、無気力な気持ちを引き起こすと推察

される。

3年間の児童期から青年期の親子間葛藤に関する研究を実施して、次のようにまとめることができる。

我が国においても、米国と同様、中学生の時に最も葛藤頻度が多く、また家庭での出来事や学校・学習による身近なことで親との葛藤が生じることが明らかにされた。しかし、親子間葛藤を乗り越えることで、子どもは大学生になると親に感謝の気持ちを抱くことも明らかにされた。

質問紙調査による研究より、小学生より中学生の方が母子間葛藤を高く感じ、母親より子どもの方が葛藤を高く感じる傾向がみられた。母子間葛藤と養育態度、心理的適応との関連においては、性別、小学生中学生に関わらず、理解尊重スキルが母子間葛藤を抑制し、心理的統制は母子間葛藤に影響を及ぼし、母子間葛藤は精神的健康と心理的ストレスに影響を及ぼしていた。

<引用文献>

- ① Dekovic, M. Parent-adolescent conflict: Possible determinants and consequences *International Journal of Behavioral Development*, 23, 1999, 977-1000.
- ② Harold, G. T., Aitken, J. J., & Shelton, K. H. Inter-parental conflict and children's academic attainment: a longitudinal analysis. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 48, 2007, 1223-1232.
- ③ 細田 憲一, 反抗期のない子は問題かー反抗期の意味を考える, 児童心理, 2008, 1471-1475.
- ④ 西平 直喜, 成人になることー生育史心理学からー, 東京大学出版会, 1990.
- ⑤ Reisch, S. K., Bush, L., Nelson, C. J., Ohm, B., Portz, P. A., Abell, B., Wightman, M. R. & Jenkins, P. Topics of conflict between parents and young adolescents. *Journal of the Society of Pediatric Nurses*, 5, 2000, 27-40.
- ⑥ Robin, A. L. *Communication training: An approach to problem solving for parents and adolescents*. Unpublished doctoral dissertation, State University of New York at Stony Brook. University Microfilm, Ann Arbor, MI. 1975.
- ⑦ 白井 利明, 大人へのなりかたー青年心理学の視点から, 新日本出版社, 2003.
- ⑧ 白井 利明, 青年期のコンフリクトを親子はどのように体験するかー前方視的再構成法を使ってー, 青年心理学研究, 27, 2015, 5-22.
- ⑨ Smetana, J. G., Daddis, C., & Chuang, S. S. "Clean your room!" A longitudinal investigation of adolescent-parent conflict resolution in middle-class African American families. *Journal of*

- Adolescent Research*, 18, 2003, 631-650.
- ⑩ Steeger, C. M., & Gondoli, D. M. Mother-adolescent conflict as a mediator between adolescent problem behaviors and maternal psychological control. *Developmental Psychology*, 49, 2013, 804-814.
- ⑪ Sturge-Apple, M. L., Gondoli, D. M., Bonds, D. D., & Salem, L. N. Mothers' responsive parenting practices and psychological experience of parenting as mediators of the relation between marital conflict and mother-preadolescent relational negativity. *Parenting: Science and Practice*, 3, 2003, 327-355.
- ⑫ 杉村 和美, 竹尾 和子, 山崎 瑞紀, 青年一両親間の葛藤調整過程に関する面接調査, 発達科学研究教育センター紀要, 21, 2007, 39-54.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

- ① 渡邊 賢二, 大学生が回想した親子間葛藤一面接調査より一, 皇學館大学紀要, 査読無, 53 巻, 2015, 1-14

〔学会発表〕(計10件)

- ① WATANABE Kenji, HIRAIISHI Kenji, The relationship between Japanese mother-adolescent conflict, parenting attitude, and psychological adjustment, The 17th European Conference on Developmental Psychology, 2015/9/10, Braga (Portugal)
- ② HIRAIISHI Kenji, WATANABE Kenji, Moderating effect of sense of mutual trust on the association between mother-child and well-being in Japanese early adolescents, The 17th European Conference on Developmental Psychology, 2015/9/10, Braga (Portugal)
- ③ 平石 賢二, 渡邊 賢二, 児童期から思春期の母子間の葛藤一葛藤の種類と子どもの心理的適応との関連一, 日本教育心理学会第 57 回大会, 2015/8/27, 朱鷺メッセ (新潟県・新潟市)
- ④ 平石 賢二, 渡邊 賢二, 児童期から思春期の親子間葛藤 (1) 一学年差と性差について一, 日本発達心理学会第 26 回大会, 2015/3/20, 東京大学 (東京都・文京区)
- ⑤ 渡邊 賢二, 平石 賢二, 児童期から思春期の親子間葛藤 (2) 一養育スキルとの関連一, 日本発達心理学会第 26 回大会, 2015/3/20, 東京大学 (東京都・文京区)
- ⑥ 渡邊 賢二, 平石 賢二, 田 玲玲, 母親の養育スキルと子どもの心理的適応との関連一思春期の子どものその母親を対象として一, 日本青年心理学会第 22 回大会,

2014/11/1, 名古屋大学 (愛知県・名古屋市)

- ⑦ 渡邊 賢二, 平石 賢二, 児童期から思春期までの母親の養育スキル (1) 一母子が認知する母親の養育スキルの因子パターン一, 日本心理学会第 78 回大会, 2014/9/11, 同志社大学 (京都府・京都市)
- ⑧ 平石 賢二, 渡邊 賢二, 児童期から思春期までの母親の養育スキル (2) 一母子が認知する母親の養育スキルの学年差と性差一, 日本心理学会第 78 回大会, 2014/9/11, 同志社大学 (京都府・京都市)
- ⑨ 渡邊 賢二, 思春期の親子間葛藤と養育態度との関連 (ラウンドテーブルテーマ: 思春期の親子間葛藤を考える), 日本発達心理学会第 25 回大会, 2014/3/21, 京都大学 (京都府・京都市)
- ⑩ 田 玲玲, 平石 賢二, 渡邊 賢二, 中学生の母子関係における親権威の信念の不一致, 親子間の葛藤と子どもの心理的適応, 日本発達心理学会第 25 回大会, 2014/3/21, 京都大学 (京都府・京都市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡邊 賢二 (WATANABE, Kenji)
皇學館大学教育学部・教授
研究者番号: 50369568

(2) 研究分担者

平石 賢二 (HIRAIISHI, Kenji)
名古屋大学大学院教育発達科学研究科・教授
研究者番号: 80228767